

第1分科会—ラウンドテーブルミーティング

「地域文化・歴史遺産をMICEでどう活かすか」

コーディネーター

西川 和宏 (にしかわ かずひろ)
 (株)都市環境マネジメント研究所 主任研究員

スピーカー

長谷川 孝徳 (はせがわ たかのり)
 北陸大学未来創造学部国際教養学科長／学部教務委員長／教授

歴史文化、伝統工芸、食といった地域の特性を、ユニークベニューやエクスカージョンなどMICEにどう生かし展開させているのか、長谷川孝徳氏をスピーカーに、全国各地の参加者からの現状紹介を交えて意見交換が行われました。

西川 ■ 皆さんこんにちは。都市環境マネジメント研究所の西川です。金沢市のMICEの誘致戦略の事務方を務めております。金沢市としてMICEがどうあるべきかというところで討議の取りまとめを行った経緯もあり、その後MICE推進協議会が立ち上がりました。日本コンベンション研究会で動いている金沢のスタッフの皆さんもMICE推進協議会の方たちです。そういった方々と一緒にやっている事もあって、私に今日の役目が回ってきた経緯があります。どうかよろしくお願ひいたします。

この後、長谷川先生に金沢の取り組みのいくつかをお話し頂きます。その後、他の地域から来られている方に、その地域でどういう取り組みをされているかをお話し頂きます。

今回、「地域文化・歴史遺産をMICEでどう活かすか」が基本のテーマです。私が考える地域文化と言いますのは当然地域固有の文化、特にMICEの場合は他の都市に無いもの。他の都市に比べて勝るものというのが本来考えていかなければいけないMICEでいう地域文化だろうと思っております。特に金沢の場合ですと、伝統の工芸とか芸能、祭りといった伝統文化、芸術の文化、歴史文化。それと特に一般のお客様の場合、海外からの方も含めてですが、魅力の中で一番多く挙がるのが食の文化です。金沢市の場合には生活文化的なところが地域文化の1つの柱でもありと思っております。金沢の歴史遺産的な所はご覧になられていると思いますが、江戸時代、百万石の頃というのが一番大きな資産ではありま



す。ただ、戦災に遭っていないという事もありまして、江戸時代、明治・大正・昭和それぞれの時代に出来た物が残っています。一般に金沢はバームクーヘン都市とか、歴史重層都市という言い方もしますが、そういったところが金沢の歴史と言う意味では一番地の利になっていくところではないかと思っています。ただ、それがMICEに活かされているかというところはまだまだ発展途上というのが、私たち現場で企画に携わっている中では正直なところではあります。ではこれからスピーカーの長谷川先生からお話し頂きます。よろしくお願ひいたします。

金沢は街全体が一つのパビリオン

長谷川 ■ご紹介頂きました長谷川です。皆さんのお手元にお配りしたのは金沢古地図巡りというもので、時代的には江戸時代の終り、安政4年頃、1857年頃のデータが入っている金沢の町絵図です。実はこの「頃」とはどういう事かと言いますと、ここにいろいろな人の名前、施設の名前などが入っているのですが、若干のずれがあります。この絵図は文化庁の地域活性化事業という補助金制度を活用して、金沢市のプロモーション推進課が作成したものです。

金沢は戦災に遭っておりません。大きな災害にも遭っていない。金沢市そのものが文化遺産なんですね。これを財産として活用していく事を考えた時に、まず何が挙げられるかと言うと、普通に町歩きが出来ると言うことです。今から15年前、2000年に「かなざわ・まち博」の中で私が金沢散歩学というのを提唱しまして、町歩きをいたしました。各エリアでいろんなものを見ながら歩くというものです。現在それがかなり定着しておりまして、例えばボランティアガイドの「まいどさん」という方々がそういうコースを歩いて観光客を案内したりしています。その「まち博」から発展した金沢史跡を巡る会という会が出来て、その人たちがまたいろんな町並みを散策したりしています。

これは例えばコンベンションの学会であるとか会議などには必ずエクスカッションが付いてきます。私もそうですが、総会と懇親会とエクスカッションが、学会に参加する大きな楽しみなのです。東京で学会があると久しぶりの先生たちと一杯やる事もあります。多くの場合地方都市ですと、例えば山形方面なら羽根三山へ行くとか、奈良から和歌山にかけてなら熊野古道に行きますとかいうのが入っていると、これはこういう機会であればなかなか行けないから行ってみようとかなって来るわけです。

これは参加する方々の話を聞いてもやはり皆さん同じなんですね。最近はネットもあるし、学会誌もあり、いろんな形がありますから論文にしても何でも、他の機会でも手に入れる事は可能です。しかしどこかの会場に行ったら何かをした時には、その地域のそこにしかないものというのを見たり聞いたり、そして食べたりすることが必ずついてくる。そう考えた時金沢という所は実に財産がたくさん残っている所です。例えば兼六園。金沢城、兼六園ともセットのもので、誰もが初めて来ると必ず訪れる所です。例えば尾山神社に行くとか尾崎神社に行くとかというのがあります。その他、町並みで武家屋敷を見る、寺町を周る、卯辰山へ上がる、こういうようなものがかんたんとたくさんありまして、地域に根付いた町並みの散策が可能な所です。

さらに伝統的工芸というものが非常に多く残っています。例えば私のこのネクタイですが、手描きの友禅です。普通の生地とはちょっと違います。着物地で、描かれている絵は水引です。金沢では水引細工が伝統的に盛んです。そうするとこれだけで水引と加賀友禅がセット物で、なおかつこれがネクタイになっているという、これだけで伝統工芸が現代産業となっているんな形で使う事が可能なのです。このように今ある伝統工芸を更に進化させていくということ。次に売るという時は、何でもかんでも見せてはだめで、逆にこれを東京に出したいという話があった時には、私は駄目だと言いました。金沢でないと買えない状態を作っておきなさいと。金沢に来ると買えますよと。そういう物はたくさんあるはずだと。だからお酒などでも、東京のデパートにどんどん出すと売れなくなってしまい、会社も具合が悪くなってしまふ。逆に地酒だから、ここへ来ないと売れませんという、お客様がたくさん来るのです。これはやはりここに来ないと無いのだと。この場所でなければだめなんだという事がやはりその地域のブランド、地域文化というものは必要だと思うのです。

後楽園と偕楽園と兼六園は一応日本の三大名園となっています。明治天皇がご覧になられた所が三大名園となったわけですが、私は個人的には栗林公園が好きです。非常にきれいだと思います。ただ、残念な事に四季がないのです。いろんな公園がありますが、四季がはっきり見える公園と言うのは、例えばこの兼六園、あるいは彦根の玄宮園というような所は四季がはっきり見える所です。冬に雪吊りがされていて雪が積もる。ついこの前までは積もった雪で真っ白でした。そうすると雪の兼六園を見たいと言う方々が来られて、雪の金沢で会議をやらないのですかとか、いろいろよく言われる事があります。

金沢で冬に学会をやらないのですかと言われますと、私はやりませんと言います。観光で来て下さいと言います。冬に学会などを金沢でやるとリスクが大き過ぎるのです。飛行機が欠航になるとか、電車が止まったとか、高速道が動かないなどのリスクがありますので、大きな動きは非常に難しいのです。けれど夏場にそういう団体の人たちを呼んでおいて、写真だけ見せます。冬はきれいですよと。1年中桜、紅葉、雪という四季がはっきりしているのが金沢の魅力的な所でもあります。

これは風土というものに密接に関係しているのです。日本各地にいろいろな風土があります。FOODの風土、食文化ですね。食文化の風土となると、「フードピア金沢」というのをやっています。冬の食べ物是非常においしい物がたくさんありますので、それを目当てにまた来られる方がいます。こうしたものをいかに活かしていくのかという事が大切になるうかと思いま

す。特に冬の食べ物は北陸全体に言える事ですが、冬を越すための越冬食、あるいは保存食。糶を使ったり塩蔵、塩漬けですね。こういった物も豊富にあります。当然、水とお米と温度の関係からお酒もおいしいものがたくさんあり、それに合うような食べ物もたくさんあるわけです。何か会合をすることになると、その食べ物に魅せられて来られる方がたくさんおられます。JTBが「るぶ」で見る・食べる・遊ぶとしましたが、私は最近「るぶぶ」と「ぶ」をもう1つ付けます。それは「学ぶ」の「ぶ」です。遊ぶだけでなく、学ぶと言う事、これがないと面白くありません。そういうものがある程度地域で揃っていると魅力のある町ということになりますので、当然いろいろな催し物、イベントをするということにも非常にいい場所になってくるわけです。

皆さんにお配りしたこの絵図ですが、旧城下町全体の絵図と同時に、小さな写真付の部分があくつかあります。これは石引エリア、東山エリア、長町エリアと書きましたが、この中に番号、「i」ーインフォメーションセンターのある場所なども中に入れながら示しています。この絵図でも歩くことができるということです。

金沢は戦災に遭っていませんので、この絵図でも現在地が大体分かります。そして広い道があっても、細い道があるところから何々が見える。駐車場になっていても周囲の状況から江戸時代からの道沿いである事が分かったりします。こういう

事が出来る町は非常に少なく、その意味でもこのように持って歩く事の出来る絵図を作ったわけです。コンベンションの会議などがあると他の資料と一緒に配布するようにしています。

町全体が1つのパビリオンという考え方が出来ます。初めにお話した「かなざわ・まち博」なども町全体がパビリオンという構想で始まったものです。こうした事例は長崎や松山、大阪など各地域の資源を活かした散歩学のようなものが増えてきました。その分、地域の事がよく分かるのでそれを使った会議や産業振興などが出来るようになると思います。

歴史文化を観光と産業につなげ、 KOUGEI を世界に発信する

もう1つは伝統的なものがMICEの時にどのくらいその地域で活かされるのかという事です。基本的には伝統的な物というのは本物なら大体活かせると思っております。例えば金箔の99%は金沢で製作されますが、金100%の純金の金箔というのはありません。純金ですと書いてある店がありますが、これは皆嘘です。なぜかと言いますと金箔というのは叩いて広げるわけです。小さな小さな金の粒を叩いてずうっと広げていくのです。そうすると純金は穴が開いて広がりません。うどんやそばと同じで、つなががないとだめなんです。そのつながに銀が入っていたり、銅が入っていたりします。だから純金はあ



り得ません。90何%という事になります。別のものが入ると広がりやすいのです。そうすると折角98%など品位の高い金があっても、純金と書いてしまったために、知っている人が見ると嘘だとなってしまいます。そこが問題なんです。金箔はこのようにして作るのですと、きちんと表示する。工芸の物はきちんと伝える事によって、より素晴らしい物だという事になります。

最近ではシール状になった小さな金箔があり、貼れるようになっていて、誰もが簡単に貼る事ができると思われまます。でもそうではありません。実際金箔は少しの風でくしゃくしゃになります。大きな金箔を作るには竹のへらを使います。静電気が起きないようにするためなのです。もう一つ、金沢でなぜこれだけ金箔が盛んなのかという事ですが、歴史的なものもありますが、もう一つは湿度の問題です。金沢は年間の平均湿度が70%くらいあります。非常に湿度の高い土地です。弁当を忘れても傘を忘れるなというくらいです。冬も雪があります。2日に1回は雨が降るくらいの計算になります。湿度が高いという事は静電気が起きにくくて、金属の薄いものは扱いやすいのです。あるいは漆も同じです。漆も湿度の高い所ではよく伸びますし、早く乾きます。ですからこの北陸方面もそうですし、飛騨高山とか会津、若狭など湿度の高い所は漆の名産地になるわけです。

このような風土と工芸品は歴史もそうですが、条件がいろいろ備わっているのです。そうするとシールで簡単に貼れるような物などは嘘なんで、最近は体験観光でいろんな事が出来まますが、伝統的な工芸でも簡単に出来ると思われまます。そう思われると価値が下がってしまいます。どれだけやっても出来まませんと言う所を簡単に出来るように見せて初めてすごいなとなるわけですから、そうしたものを本物として残していく必要があるだろうと思います。

もう一つの本物、例えば着るものなどもそうです。最近金沢にも着物振興会のNPOの団体もあり、レンタル着物もあります。品質はいろいろです。やはりいい着物を着る事によってそうしたものが売れるという事があります。帯が緩むというのはほとんどの場合、化繊が入っているからです。きちんとした正絹のしっかりした物でしたらゆるく結んでしっかりと締まります。今日、私は洋服ですが、授業の時でもよく着物を着まます。帯もきつく締めません。きつく締めなくても緩みせん。女性でもきつく帯を締める人がいて、胸が苦しいなどと言いますが、本来はそうようにきつく締めるものではないのです。本物を使うといいのです。

そういうものをきちんとやっておくと、今度は産業として残っていく事につながると思います。このような歴史文化は観光と産業という事につなげていかないといけないのです。さら

にそれが世界へ発信する事になる。私は基本的にはクラブ、金沢もクラブ都市と言ったり、市にもクラブ課がありますが、あれは工芸課にしたほうがいいと思います。ローマ字でKOGEIと書くべきです。要は日本から外国に発信する時にクラブでは日本のものではないのです。KOGEIでなくてはいけません。伝統的な漆、彫金技術、象嵌技術などいろんな伝統工芸があります。よその国にはないものがたくさんあるのです。これは日本独自のもの、石川県、金沢市独自のものは世界に発信する時は日本語なくてはなりません。あくまでもKOGEIです。どう訳すのですかという時には、工芸は工芸だと言うといいのです。「腹切り」をどう訳すか。「腹切り」は「腹切り」です。食べ物でもすき焼きはすき焼きです。それと同じです。そうする事によって本物の工芸にどういうものがあるか「見たければ来なさい」でいいわけですからね。そしてインバウンドを増やすと言う事が出来ますので、言葉1つの扱いも大切にしなければならないのではと考えています。

KOGEIという言葉海外で言う事に意見が一致したのは陶芸家の大石利雄先生とです。ある会議の時に工芸はローマ字でKOGEIとすべきだとお話したら、私もそう思うと言われました。工芸をやっている方もそう言います。こういう作り方、技術は日本にしかないものであるから日本語で世界に通用するようにしたほうが良いとおっしゃられました。町、地域というものを通して良いものを残すという事はそういう事もちゃんと考えていかなければいけないのではないかと考えております。

食も歴史的な裏付けをもって発信し、魅力を高める

食文化についての研究も進んでいます。私も依頼されている研究がありますが、例えば治部煮という金沢の伝統的な食べ物があります。これは秀吉が朝鮮出兵の時に、料理奉行の岡部治部右衛門が考案したものとされ、その名を残しています。あるいはジブジブと音がするからだという説もあります。ある大きな店では鴨を使うフランス料理のジビエに由来すると言っています。加賀料理として治部煮の由来がいろいろあつては、治部煮そのものの価値を下げてしまいます。そこで何が本物かという事を調べるのが私の研究です。

1640年頃、寛永年間に書かれた「料理物語」という本があります。そこに「しふ」=治部=と書かれてあります。これは鉄鍋に溜り醤油と砂糖を入れ、鴨など水鳥の油が醤油と砂糖と混ぜて「ジブジブ」と音がする。そこへ肉を入れ、ワサビを添えてとあります。由来は、音なんですね。そして鍛焼とありますから、今のすきやきのようなものですね。それを100年くらい後に加賀藩の料理方が煮物に変えるわけです。

それが治部煮です。いろんな物が入るようになりました。

野菜も豊富です。「いいね金沢加賀野菜」とPRされており、ネット上にもいろいろと野菜の情報が載っています。金沢には五郎島金時という大変おいしいサツマイモがあります。1700年頃、粟ヶ崎村の太郎右衛門が薩摩から種イモを持ち帰って広げたとされています。ところが1698年に琉球の王様が種子島に初めて種イモを持って行ったと言う記録があります。するとその後2年くらいで加賀まで来たという事はあり得ない。もう1つは将軍吉宗が全国へ1720年くらいに、飢饉のときでもよく育つからとサツマイモの流布を言っている訳ですから。

次は文政6年に本田某が金沢に来て海岸の砂地にサツマイモを植えたら「繁茂いたし候」、つまり植えたらよく繁るであろうと言っています。当時はまだ植えていないのですから、1800年代に入ってからそういうものが出来たという事になります。そういう伝説がどこで生まれたか分かりません。いずれにしてもこのようにきちんと歴史的にしたほうがより本物になるわけです。

そうする事が地域の魅力というものを引き立てることにつながると思います。やはり観光ではきちんとした裏付けがあったほうがよりいいものが題材としてできるし、資源として発信する事は可能ではないかと思えます。

インセンティブツアーでは金沢城や 醤油蔵を使ったパーティ

西川 ■長谷川先生、ありがとうございます。私から補足も含めて少しお話しします。北陸新幹線が3月14日に開業します。実は4月と5月前半と10月、11月はもうホテルは取れない状態になっています。新幹線1年目という事が当然あるのですが、4月、5月に大きな行事ありまして、一番大きいのは10月の自治労全国大会、2万人というのがあります。今まで金沢は1万人で限界に挑戦と言われていたのですが、その倍で大丈夫なのかと業界内でいろいろ言われています。翌年に関してはそんなに埋まっていなくて新幹線1年目だけすごい状態になっています。

そういう意味では今年だけはすごくいいのですが、正直言いましてキャパシティでいいますと金沢はいいところ3000。実際は1000から2000くらいをこなすのが都市の規模に見合ったところかなというところなんです。今回のフォーラムの会場の「しいのき迎賓館」エリアには2000人キャパのものが1つ2つあるので、そこそこ出来るのですが、1つ1つが2000という事もあるのでちょっと微妙なところなんです。あと、宿泊施設がこの傍にあまりないという問題もありまして、今はどちら



かという駅の周辺が、圧倒的にコンベンション等が開催されているエリアです。ここにある県立音楽堂がキャパ2000人のホールでして、普通はここで学会、コンベンションの大体総会的な事をして、この横にANAクラウンプラザホテル、向かいに日航のホテルがあります。その周辺に大型ホテルが駅前はかなり集中していますので、分科会はずべてホテルで行うのが最も一般的な開催のスタイルです。

金沢は城を中心にして1.5キロくらいの範囲にほとんどの観光施設等も含まれているので、本来は歩いて行ける距離にあり、それが金沢の売りなんだろうなと思っております。今、旅行代理店系に受けるのはここ、城を使ったパーティーです。国宝級のお城の中で何かをやるのはもってのほかですが、ここは新しく造ったものなので、在来工法の木造で、中ではパーティー等はOKです。このように城の中で実際にパーティーが出来るのですが、私共も夏にインセンティブツアーをやる予定で企画を練っていましたが、先週トップの方が来られて、この一番の弱点はトイレがこの中に無いと指摘されました。歩いて20メートルの所にトイレがあるのですが、インセンティブツアーでトイレまでそんなに歩かせるのかという話になりました。また、空調もありません。冷風機を入れるために100万円くらいの予算を取っていたのですが、そこまでやる必要はないということで、城での150人ほどのパーティーは却下となりました。ただ、夏以外の春や秋ならばよい季節なので使われています。このような事例として建築の学会、料飲業組合、料亭の全国組合などの時は外を使って大々的なパーティーを催しています。特にここにはスペシャル感があるので、しかも夜は完全貸切が出来、全部借りても数万円くらいなので、そういう意味ではすごくメリットのある所です。

「しいのき迎賓館」は、向かいの石垣を見ながらのパーティーがきれいでよく使われます。また、醤油蔵を使ったパー

ティーで、次回のインセンティブツアーはここを使う予定をしています。ここでは実際に醤油を絞ってMy醤油をビンに入れ、それを持って寿司屋へ行き、その醤油で寿司を食べるコースを入れています。これは歴史から言いますと醤油蔵として日本で4番目くらいの産地であり、そういった所を文化遺産として使っているわけです。

「たしなみ塾」という事で、金沢は先ほどの伝統文化というところで、お茶の裏千家発祥の地でもあります。幹部になりますとそれなりの所作と言いますか、振る舞いが必要になりますので、そういったものや、1泊2日の日程でお茶、華道の高価な道具を触ったり見て頂くとか、あとは芸妓遊びなど諸々を含めて短期ですがそういったことを身に付けて頂ければというものを企画として立てているものです。

こういったものは非常に人気があって、しかもこれらは地元でないと予約が出来ないもので、例えばお茶屋さんをお願いしますとか、どこかの偉い先生にお茶の手ほどきを願いますとか、地元の骨董屋さんなど、あくまでこちらでしか出来ないものなのでこういったものを強みにしていけるというものを考えています。これは工芸、菓子など伝統的なものです。

金沢では体験できるものがあります。料亭も他の地域に比べると多い。やはり食も1つの魅力です。芸妓さんもそこその数、50人ほどいます。加賀宝生という能の体験もできます。あとはアトラクションとして大きな獅子を使う獅子舞や加賀漫才、顔を赤く塗って練り歩くびゃっこ行列などもコンテンツとして持っています。茶室についても金沢市が力を入れており、この近くに市が用地を買収して茶室を使って何か出来ないかを考えています。

金沢の現代地図の上に江戸時代の町割りを乗せたものですが、白く抜けているのが江戸時代から残っている道です。こちらは重要文化財など施設的なものを表しています。金沢にはお寺、神社が多くあります。特に寺町と卯辰山には大きな寺院群があり、寺町は他都市と寺町サミットというのを開いて、寺を使つての合宿誘致などを手掛けている状況です。また、金沢は水の都とも言われており、用水が55本、総延長150キロに達しています。あまり使われていない資源ですが、そういうのも忘れないために入れてみました。

長谷川先生からも歴史的なところについて、史実を踏まえ、本物をきちんと伝えていく事の大切さについてお話を頂きました。時間も経っていますので、少し他の都市の方から事例をお伺いできればと思います。先ほど引き合いに出しましたが松本の観光コンベンション協会の戸部さんから松本の取り組みをお聞かせ願えますか。

【会場から】

草間弥生美術館の中庭でパーティが好評

松本・戸部 ■松本の戸部です。松本城もいろんな世界のサイトで美しい城として取り上げられており、海外の方に非常に人気の高い城です。まず城についてお話ししますと、私が担当になってから医学会で1回、国内の外国教師の会でパーティーを1回やっています。ただ、国宝の範囲内では絶対無理ですので、城郭公園のような形になっていて、濠の外側にちょっとしたスペースを見つけまして許可を取り、そこでやりました。最近では2年前に国内外外国人教師の会のパーティーをやりました。ただ、問題がありまして、松本城は世界遺産にはなっていないものですから、住民運動で世界遺産にしようという運動があります。城の側からはそういう運動をしている中でそういう俗的な事をやるのはいかなものかと言われ、誰にも応援されない中で一部の人間の利益の為にやるという感じです。ただ、やるに当たっては城側に熱心に許可を取りに行ったり、公園ですから一応クローズはするのですが、完全には出来ないで、ご近所にご挨拶に行くとか、そうした事を最低でも主催の先生たちに我々と一緒に4~5回はやって頂いています。

そんなこともあって、先ほど金沢ではエージェントに売り込んだりという話がありましたが、私のほうは絶対に売り込めないうです。公にすると出来るような話でもないし、事務的手続きがあるわけでもなく、主催者の熱意だけで許されているというところがあるものですから、最低でも1年に1本しか出来ません。今年は秋に2本の企画をしているのですが、さてどうなるかということでもありますが、本当に今言いましたように表には出せないけれど主催者の先生が是非やりたいという気持ちがあれば出来ない事ではありませんから、逆にプレミア感があったり、先生が1年前から熱意をもって一緒にやってくれるという事で、当日が非常に熱いものになってきて、やり切った感が関係者に非常に出ます。当然、国宝の横という事でごみは1つも落としてはいけない場所ですので、朝5時からの掃除にも皆さん何の苦も無く出てきてくれます。

広くは使う事は出来ないのですが、ある意味、皆さんにとって本当に思い出に残るパーティーにはなるのではないかとという事で地味に実は出来るという事を伝えているにはしています。その辺がちょっと我々の仕事としてはパンフレットにも出せませんし、ここでも言っている事なのかどうか迷う所もありましたが、公園の外で市から許可を得てやったという事で発表させて頂きました。

西川 ■お城の話でしたが、それ以外で美術館を貸し切ったという話を聞きました。

松本・戸部 ■以前に草間彌生さんというドット模様の作品で有名な方がおられますが、私の中学の大先輩で松本市の出身です。草間さんの作品を中心とした美術館がありまして、国際大会があってパーティーをやりたいという話がありました。その時に70人くらいだったのですが、ふと思いつき、月曜日が休館日だったので、その日に中庭でパーティーが出来ないかという事で美術館と交渉しました。中庭の横にフランス料理店があってちょうどいいですし、休館日だからクローズも出来ます。もう1つ良い点がありまして、参加者だけのガイドツアーが出来ました。館長さんに参加者70名だけに草間さんの作品の解説をしてもらう事が出来ました。また、夕暮れ時にやったものですから、キャンドルを100本ほど中庭に置きまして私と同僚と2人で着火しましたが、時間がかかったのですが、それが夕暮れとうまくマッチして非常に良かったと言われました。

フランス料理店の出店時に私も関わっていましたので我がままを言わせて、食材はすべて松本の地の物にして頂きました。フランス料理店ですが日本酒も用意してもらい、ワインも地元の物も5、6種類用意しました。お陰様で雨も降らずに良かったと思います。

新潟は酒と米で世界に認知されるよう目指したい

西川 ■ありがとうございます。では新潟のMICEを中心にやっておられる阿部さん。以前も取り組みを伺いましたが、現在の活動をお聞かせ願えればと思います。

新潟・阿部 ■新潟県MICE研究協議会の阿部です。新潟にはお城もないですし、あまりないのが現実です。歴史的な事でも新潟はあまり出てこないというイメージで皆さん認識されているのではないかと思います。上杉謙信がいて、戦国末期に少し有名になったのですが、残念ながら隣の山形県の米沢に移られましたので全く新潟には残っていません。あとは佐渡の金銀山という事ですが、あれも流人の関わりのような事があってなかなか今日のテーマの歴史的・文化的というのが出てこないのが現実の新潟なのかなと思います。

新潟も大きく新潟市、長岡市、誰か今日は来ていますが、それから上越市。今回の北陸新幹線の駅が出来ました。長岡は戊辰戦争の時に日本国内で唯一戦場になったんですね。意外と会津の城が有名ですが、平地で戦いがあったのは歴史的には新潟県だけという事で、長岡の河井継之助という人がいろいろあったりしてくちゃっとなってます。山本五十六さんが出た関係で太平洋戦争の時も戦争でくちゃっとなってます。新潟市には1回原爆投下の飛行機が来たのですが、天気が悪くて戻って長崎に落としたという事で、いろいろとその辺の歴史に難しいところがあります。

唯一、港町だったという事なんですが、新潟は川港と言って、長野県から来た砂が溜まって浅瀬になっていますからなかなか岸壁に着けられない。遠くに船が停まってそこから小さい船が新潟の中に行き来したという事で、今見ても港町らしさというのがほとんどないような所です。

そのように何も無いねという新潟ですが、1つにはお米がおいしいとか、お酒がおいしいとかいうくらいかなと思います。先ほどの金沢の食の話が出ました。全国あちこちにお邪魔しますが、基本的にどこへ行ってもご当地につきまちは食がおいしい。確かに取れる食材には違うところがあるのです



が、あまり違いを感じませんし、金沢も水の都という話がありました。大阪も水の都ですし、岐阜の大垣も水の都。松江も水の都。新潟も川があって沼があるので水の都としばらく前まで言っていたのです。全国どこも水の都と言っているよねという感じになってきています。なかなか見出しえない中で、ある物に磨きをかけていこうではないかというのが1つあります。歴史的な物があまりない。史物も残っていない中で、今現在ある物は何かという中でお酒というのがちょっとありまして、3月に酒の陣というのがありまして、2日間やるのですが関東からも10万人くらいの人に来て、90くらいある新潟の酒蔵がそろって出て、全部試飲が出来るというのが1つ大きな形かなと思っております。今考えているのは新潟だけではなく全国の酒蔵を集めて酒の陣、日本の酒サミットの開催です。その後はロシアからウォッカが来て、スコッチが来て世界中の酒が新潟に集まるというワールドワイド的な酒の陣をやれたらいいなと思っています。米がありますが食べる米ではなくて、エネルギーとしての米とか、もっともって米に一極集中して進めていくという事も考えていけたらと思っております。

このように一極集中にやっっていこうという事につきましては新潟市が政令指定都市になって10年くらい経つのですが、最初の記念講演会で堺屋太一さんという方が来て、イタリアのミラノの地名を出したのですが、その市の予算の1%をかける事業を10年間続けると世界に冠たる都市になると話されました。新潟市は今、4800億円くらいの規模ですから、1%は40億円ですが、それをあるものに10年かけたら、酒だったら酒、米だったら米にかけていいたら世界に冠たる都市になると聞きまして、さすがに1年で40億円をかけたら地域住民に怒られますが、それくらい集中しながら進めていく事がない。何も歴史的なものを持っていない地域からしますと、やはり1点に集中して進めていく、その1点が何なのかという事では自分たちが近く持っているものという事で酒だったり米だったり、田んぼだったり、そういうものを集中していくのが世界から「酒だったら新潟だ」「米だったら新潟だ」と言ってもらえるように目指して行けたらと思っております。

それが段々ひもといて行くと、地域の文化だったり歴史だったり、どんどんどんどん幹に枝が着いてくるような形になるのではないかと考えている今日この頃というところ。何せ上越新幹線は往復運動しかしないので、単純で申し訳ないのですがそんなところが新潟の近況です。

西川 ■北陸新幹線の開業は、新潟の方々からするとかなり危機感を持たれているのでしょうか。

新潟・阿部 ■意外とそれほどではありませんね。3月18日に

新潟で副知事をパネリストにして何とかしなければいけないというシンポジウムを企画していますが、昨年仙台に行った時、仙台のほうが、危機感は強かったですね。関東の人が皆金沢に行くのではないかという事で、仙台は東北大学と仙台市がMICEだけの包括契約を結び、定期的に大学の先生たちが学会開催情報を提供するなど、MICEのC系でしょうか、それだけで月1回テーブルを囲んでいると言っていましたので、相当な危機感だなと思いました。

ユニークベニューを開発しても、パッケージ化はできないのが悩み

西川 ■では、次に松江のコンベンションビューローの方から取り組みをお聞かせ願えればと思います。

松江・三宅 ■松江のほうも基本的にはMICEのCの部分、コンベンションを通じまして地域の活性化を図っていくという一貫した事を過去20年以上続けています。なかなか次のMとかEには進めない状態の中、今後も当面はそれを中心に据えてやっっていこうという主旨ですが、コンベンションの誘致・支援を継続してきております。

特に近年、ターゲットを絞っておりますのが、国際会議です。島根県では年間のコンベンションが140から150件くらい開催されていますが、国際会議と言いましてもまだやっと2ケタに乗ったという状況なので、べら棒に多いと言うわけでもないですが、我々は実は県の財団ですが、特徴としましてはコンベンションセンター「くにびきメッセ」の管理運営を私共の団体が直接やっております。ですから建物を持ちながらコンベンションの誘致及び支援をやっているというようなやり方をしています。少し前まではこういう形でやっているのはあまりなかったとお聞きしていますが、幸いな事に私共はその形で事業を継続出来ております。

最近の話ですが、コンベンション、学会関係が多いのですが、そういったものの中で今回のテーマであります歴史遺産といったものをどう活かしていくか。具体的にはユニークベニューの話になるではないかと思いますが、まずユニークベニューにつきましては実はいろいろと題材があります。一番多いのは松江フォーゲルパークという花と鳥のテーマパークがありまして、そこに巨大な温室がセンターハウスとして1年中花のある空間となっています。立食ですと500人くらいのキャパがあります。花に囲まれた中でのパーティーという事でスタートしましたのが10年くらい前です。今は非常に人気がある場所です。

それと対極をなす形かと思っておりますが、全く違ったスタイル

のものとして、松江市の近郊から車で20分くらいの所にありますが、大根島という島があります。昔から牡丹の栽培が非常に盛んな島でして、その由志園という牡丹園でバンケットを楽しむ趣向が最近人気があります。純和風の雰囲気のある日本庭園を眺めながらバンケットを楽しんで頂けるので、国際会議ではここが一番人気のある場所となっています。

松江で開催される国際会議の8割方はここでバンケットをやるのですが、皆洋食ばかりでやるわけでもありませんし、主催者の中には松江での会議が2回目、3回目という方もおられまして、そうした先生たちにとってみればまた由志園か、と言われる方もおられるので新たな場所の開発という事を水面下では進めております。まだ具体的にお話し出来ませんが、来年度中に新たな第2第3のユニークベニューを打ち出していきたくて考えております。

もう1つ別のスタイルとして、こういった体験型のもの、珍しい歴史と文化を体験して頂こうというものを組み込んでいくのも1つのスタイルかなと思っております。私共でいろんなエクサージョンの形があるのですが、変わったところでは、私共の中国地方では江戸時代から「たたら製鉄」が非常に盛んでして、県内にはまだ製鉄方法が残っています。昔は山を切り崩して砂鉄を採りまして、それを精製して鉄を取り出すという日本古来の技術ですが、今でもやっている所がありまして、日本刀を作っています。山間部にはたたら場という屋敷が日本で唯一残っています。そこへ案内するツアーも10年くらい前からスタートしたのですが、そのツアーを考えたのは我々ではなく、主催者の方からせつかく島根県でコンベンションをやるので、ぜひたたら場を見たいという話がありました。そのたたら場、菅谷たたらという名称ですが、是非そこへ行きたいのでツアーを組んでほしいという事でした。我々も昔から知っ

てはいましたが、それをツアーに組み込むという発想はありませんでした。ただ、主催者側が面白いという事なので、やってみようという事になり、国際学会でした。がツアーを組んだところ非常に受けまして、その傘下の先生から口コミで伝わり、別の先生からもツアーの引き合いを頂くようになりました。

今は製造するわけではないので、その現場を見るのではないのですが、いろいろ空想しながら歴史文化を

勉強しながらのツアーで、非常にマニアックなものとも言えますが、大学の先生や研究者にとっては非常に面白い題材という事で我々も最近でもいろいろとツアーを組んでいます。

今回のテーマに沿って言いますと、その2つは我々が今一番力を入れているところですが、そういった新たなベニューの開発は非常に大事だと思います。それがすべてのコンベンションに活用できるかという、なかなか難しいものがあると思います。先ほどのユニークベニューもそうですが、主催者が是非やってほしいという事で、それに基づいて我々がお手伝いをして実現したものもありますが、それが別の機会に提供できるかという事になると、なかなか一般的な商品として打ち出せないというところがあります。

例えば先ほどお城の話が出ましたが、私共にも松江城という築城当時を現存している城があり、そこで是非やりたいという声は四六時中あるのですが、天守閣までは入れませんし、近隣の公園を使ってやるというのも雨の心配があるので、やった事はあるのですがなかなか一般化できません。それを恒常的に資料として主催者の方にこういうユニークベニューなんですよというのを見せる形で、なおかつその内容をパッケージ化されたものに出来ない、これを武器にコンベンションの次の誘致につなげる事は出来ないというのが我々の今の悩みではあります。

西川 ■ 実際、こちらの考えている事と違うのですね。たたらなどはまさにそうだと思うのです。私たちが良くあるのですが、もしかしたらですが、あまり価値を認めていないものが主催者から注目されるケース。たまたま主催者側が独自にいろいろ調べての事か、あるいは情報提供の結果なのか。

松江・三宅 ■ 筑波大学の研究者だそうです。我々も情報提供



しますが、先方もいろいろ知っていて観光の話も出て来ます。そういう話をする中で先方が一番興味を持っている内容を探り当てていく。それを実際のコンベンションに活かさないかというように考えていくのが我々のやり方です。オーダーメイドのところもまだあります。たたらケースの場合は先方の方が島根県にたたらが残っていますよねという話を始めて、あちらから出されたアイデアだったと思います。

西川 ■ 今の話。売るためにはどうか、松本城の話もありますが、こちらが気が付かない魅力があって、それをうまく商品化というか、したところでうまく受けたという話もありますが、先生から見て、自分たちは分からないけれど価値のある物というのは、魅力としてかなりあるのでしょうか。

要望を聞いてコーディネートすることが必要

長谷川 ■ ありますね。私は大学に来る前に博物館にいたのですが、先ほどパーティーの話がありましたが、全国あちこちで博物館や美術館でやりたいという声があって結構やるのです。博物館の大会なんかがあるとどこかの館を使って夜そこでやるんだけれど、よく行われているのです。ただ、それを今度商品として出せるかとなると話は別になります。

どこの館でも皆同じですが、こういう事はやっていい事、やってはいけない事と分かっている人間だとそれが出来る。ここから先は絶対食べ物を持ち込んではいけないとか、虫とかカビの問題などいろいろあります。そういう事が分かっている人間だったらいいよというのがあります。同じ事が言えるのは、例えば金沢でも、私は今金沢市のプレミアムの旅行の観光庁の目付という事でやっているのですが、非常に料金の高い設定の観光のプランがいろいろ来るわけです。その時でも例えば茶室を使う時に誰でも入る茶室だったらいつでもいいのです。要は未公開になっている茶室をいかに見せるかというのがあります。そうするとこれは非常に価値が高くなってきて、見たいという応募者も増えるわけです。但しその時に茶室を知らない人も入るとやはり持ち主は困るのです。だからどうなるかと言うと、お茶をやっている団体であるとか、そのようなグループに限りますというように、どうしても限定付になります。

先ほど松江のほうでもやはりオーダーに合わせてという話でしたが、まさにそういう事なんです。こちら側がこういうグループだったらこれは喜ぶだろうなというのをいくつも資源として用意しておいて組み合わせを作っていくという事が必要だと思うのです。これはこのグループに受けたからでは次はと言った時に、それは受けるかどうか分からないという事です。だから要望をよく聞いた上でコーディネートしていく事が必要だと思

うのです。

例えば金沢にお客様が来られてご案内する事がよくありますが、事前に旅行会社の人とよく話し合った上で、どういう参加者なのか。こういう事に興味を持たれているグループだと分かると、地元の人は何だと思ふような事でも、その人たちは喜ぶだろうなというものを用意するわけです。これがやはり文化資源を活かすという1つの大きな方法なんです。金沢にはお地蔵さんがいっぱいあります。でもそれをちゃんと説明できなかったら何にもなりません。例えば江戸時代にこんなに明るくなく真っ暗で、この角にあるお地蔵さんに必ず灯明を灯す事になっていますと言うと、想像してもらえます。それだけでお地蔵さんがどうしてこういう所にあるのかというのが想像できる。そうするとそれは光の道が出来るのですと、それでもいいのです。このような事をこのグループだったら興味を持ってもらえるというのを用意する事が必要だと思います。いつも歩いている金沢の人たちは地蔵があろうと関係なしなんですが、実はそういうところがあります。

西川 ■ プレミアム感を出す時に、先ほどの使えるかどうか言えないのはなかなか難しいですね。オーダーメイドも言われる通りで、そうなるとその方に聞いたら答えられるとか、そういう世界になりますよね。皆さん、組織がしっかりしているからいいのですが、金沢が一番難しいのはそういう、誰に聞くとOK 出るのか、一般にワンストップの、沖縄でいうDMC のようなところですが、そういった所がないのです。私共にも知識はありますが、ではこれを他の所で成功しましたと言っても、それを共有出来るような仕組みが実はなくて、ホテルで情報を抱えていて、設営関係の方も抱えているという状態で、それが一番悩むところで、もしかしたら新潟も同じ悩みがお有りなのかもしれませんね。

長谷川 ■ そういうのがあった時、私もそうなんです。石川県の観光戦略部にスペシャルガイドという制度がありまして、いろんな専門の人がガイドとして登録されるのです。よくあるのは問い合わせで、観光の業者にも名簿が行っております。そうするとそこからこういう内容の事をお話し出来ますかとか、案内できますかとかいう問い合わせがありまして、県や旅行者、他の都道府県の観光の方から電話が来ることがあります。団体の説明を受けて、それならこういうのがありますよとか、あるいは私はその辺は不得意ですが誰々さんが得意だから頼んでみてはどうですか、というようなシステムが一応あるのです。ただそれがどこまで浸透しているかがちょっと分かりません。

西川 ■まとめるという話でもありませんので、できるだけ皆さんの事例を聞いたほうがいいかと思います。新幹線の関係ですとお隣の富山県さんも盛んに取り組まれておられます。今日はPCOの西田さんいらっしゃいますか。現況をお聞かせください。

ユニークベニューも公にできないものから積極的な活用を望む施設までさまざま

富山・西田 ■富山の株式会社PCOです。歴史遺産という話と地域文化というところで、富山でコンベンションが中心なんです、開催する時は富山市の富山駅周辺の中心市街地ですね。この辺りで開催することが一番多いです。その辺りは文化的なものはもちろんあるのですが、建物という意味では空襲による消失率が日本一という事で、中心市街地がほぼ無くなったという歴史があります。今、環境未来都市という事で宣伝されて、都市計画としては非常に新しい町という中で進んでいます。

一方で歴史文化になってくると少し離れた場所に増えてくるという傾向があるのですね。実績として、さきほどユニークベニューというお話で会議をどうしても町中でやるものですから、そこから例えばパーティーをやりようとした時にもそんなに遠くまでは移動できないと言う事で、市内電車セントラムに乗って頂いてグランドプラザという全天候型の屋外空間、広場があるのですが、こうした所でパーティーをして頂くというようなプランを作っています。さっきパッケージが難しいという話がありましたが、確かに許可が必要な場所と言うのは富山でももちろん難しく、一度実際に水墨美術館という所でパーティーをやらせて頂いたのですが、それを広く皆さんにご案内するというのはちょっと難しいと言う話になっています。

一方でグランドプラザなどはどんどん売って下さいという事で、皆さんに誘致の段階で資料としてお出ししているような形になっています。歴史文化という話でいくと、さっき歴史的背景も一緒に聞くことでとてもそのものが魅力的になるという話がありましたが、勝興寺というお寺が平成32年まで改修工事中ですが、国内でも珍しい大規模な工事だという事です。観光的な意味でも工事の視察のツアーが申込み出来るようになっています。ただ、コンベンションの主催者はそういう事をあまり分かっていないという状況がありましたので、我々のほうでそれもパッケージというか、コンベンションのアフターなのか、何らかの形で行って頂けるようなようにしたいという事でコンベンション主催者に情報を提供していくような事もしています。

新幹線に関しては金沢と同じように、お陰様で2015年は



春先の宿泊が取れないという事です。2016年もぼちぼちと、金沢のように大きな会議という事ではなくて割と小さな会議が入っている状況です。

西川 ■富山とは隣同士ですが、お互いに意外と情報が伝わらないという事があって、富山は新幹線開業の年よりは2年後くらいを見据えて取り組んでいきますみたいな感じの事を聞いていましたが。

富山・西田 ■そうですね。2年なのか、もう少し先になるのかと思いますが、今まさにセントラムという乗り物が駅の南側の環状線で走っているのと、駅の北側でライトレールが岩瀬という海側まで走っており、数年後には駅の下を貫通します。そうするとかなりの直線距離で路面電車が通じるようになりますので、コンベンションとしてもそこで町が完成すると言いますか、コンベンションの町として完成するというイメージを持っています。

西川 ■いろいろありがとうございます。お話を伺いしても歴史遺産は当然バックボーンとして、長谷川先生のお話でも本物として伝えていくという事がありましたが、そうは言っても使える所がかなり制約があるものが大半なんだと思います。金沢の城の例などはかなりレアなケースで、一般向けにも利用出来るのは非常に恵まれているのかもしれませんが。そうは言っても金沢も制約がある所が多いです。もしかすると歴史遺産を今回のテーマに出してはいますが、それがメインというよりはバックボーンとしてあるものであって、どちらかというとそれを元にして生み出されているのかもしれませんが。ユニークベニューだったりプログラムに盛り込んでおられるような話が多かったと感じました。

当然、強みという意味では冒頭にも言いましたが歴史的な物というのは他に無い物もあれば強みにはなるのですが、ただそれだけで行くと戦災などで無くなってしまいう問題もありますので、そうではなくても十分勝負できる物というのが、逆に言うと本当の地域文化、食も含めた地域文化ということなのかと思います。それが全体の話の中では一番印象に残ったところ。長谷川先生、いかがでしょうか。

地域性を前面に出すことが大切

長谷川 ■歴史といった時に皆さん、江戸時代とか室町、鎌倉など古い事だけをイメージしてしまうのです。そうではないのです。例えば戦後と言っても、もう既に70年です。という事はどれだけの歴史かと考えると明治維新から考えると明治で45年、大正で15年、昭和に入っているのです、70年というのは、昭和の初期の人たちが江戸時代の事をどう思っていたかという話です。例えば新潟という所は確かにある意味新しい町ではあります。けれど私は新潟というイメージとして萬代橋や古町などいろいろあるわけです。これ自体でもいろんな町、いろんな人たちのイメージを持っていて、そのイメージを壊さないとか、作り出している物がバックボーン

にあって、これがやはりここに住んでいた人たちの歴史なんですね。

ですから古いだけがいいというものではなくて、やはりそういう中で培われた10年、20年の物でもいいのです。それがきちんと残っていくような行政であったり地域であったりというものがあると、そこはやはりいろんな良い物が残るという事ですね。町そのものが、例えば富山も焼けてしまっています。けれども富山には、例えば食べる物とかは戦災に遭ったってその文化はあるわけです。そういうものなんです。だから戦災に遭った、災害に遭った、その戦災、災害も歴史のひとつコマだという事を忘れてはいけません。だから城下町だから古くからあった、ここは何もない所だという必要はない。例えば横浜や神戸を見るといいのです。ここが江戸時代どうだったのかと言えば、漁村ですね。何もなかったような場所はあるのです。でも明治以降あれだけの町になっていったという歴史があります。そういう事をやはり大事にしてその地域性を前面に押し出す事が大切ではないかと思いました。

西川 ■ちょうど良い結びになりました。これで第1分科会を終了いたします。ご静聴ありがとうございました。

プロフィール

西川 和宏 (にしかわ・かずひろ)

(株)都市環境マネジメント研究所 主任研究員

1962年石川県金沢市生まれ。85年金沢大学薬学部製薬化学科卒業後、経営コンサルティング会社を経て、都内市場調査会社に入社。消費財メーカーの製品開発や、消費実態調査、コンセプト調査、大手広告代理店の広告効果測定・イメージ調査等、プロジェクトマネージャーとして1,000件以上の調査を担当。98年地元金沢に戻り、(株)都市環境マネジメント研究所に入社、現在に至る。専門領域は、観光、地域振興、商業活性などの分野における調査、コンサルティング業務。民間企業の市場調査も多く手がける。金沢の旧市街地を博覧会場に見立てた地域資源活用型博覧会「かなざわ・まち博(2000年～2014年)」開催に立ち上げ時から関わり、地域の隠れた資源発掘に力を入れている。MICE関連では、「金沢市MICE誘致戦略」(金沢市2012年)の基礎調査及び取りまとめ、「金沢MICEガイド」(金沢市MICE推進協議会 2013年)の企画編集を担当。

長谷川 孝徳 (はせがわ・たかのり)

北陸大学 未来創造学部 国際教養学科長 / 学部教務委員長 / 教授

石川県立郷土資料館学芸員、石川県立歴史博物館学芸専門員を経て2007年4月北陸大学未来創造学部教授、2008年4月より現職。この間、東京国立文化財研究所文化財虫菌害防除システム共同研究員、文化庁文化財生物劣化防除調査研究ワーキンググループ委員、放送大学非常勤講師、石川県立看護大学非常勤講師、国土交通省河川流域委員、金沢市史編纂専門委員、小矢部市史編纂委員、砺波市立散村地域研究所研究員、高岡市開町四百年検討委員会委員、高岡市立博物館整備検討委員会委員、高岡市万葉歴史館検討委員会委員、藩老本多蔵品館学芸展示指導員などを歴任。専攻は日本文化史(有識故実)、文化資源学。